

Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka

2019-02-15

APM news 208

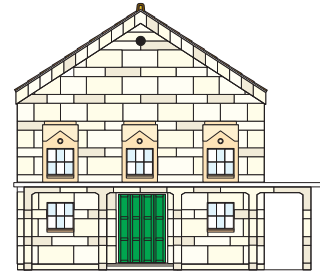
秋山孝ポスター美術館 長岡

国の登録有形文化財・長岡市都市景観賞受賞・金庫扉と雁木のある美術館

第44回美術館大学

「日本ブックデザイン賞2018について」

11月3日(土)pm3:00~pm4:30/参加者:28名/講師:秋山孝、高橋庸平



〒940-1106 新潟県長岡市内宮内2-10-8
TEL 0258-39-1233



第44回美術館大学は、4回目となる秋山孝ポスター美術館長岡 (APM) 主催で開催したコンペティション・日本ブックデザイン賞 (JBD) 2018について、展示風景、授賞式、審査会の様子や受賞作品の画像を見ながら振り返った。講師はJBD審査委員長の秋山孝APM館長と、毎年JBDに出品し、今回は新設したポスター部門で受賞をされた高橋庸平氏だ。

JBDは本におけるデザインの価値をあらためて社会に提案することを目的としたコンペティションである。その中で優れた先人や、現在活躍している創作者に対してホール・オブ・フェイム (名誉の殿堂) を設立している。今回、第4号に恩地孝四郎を定めた。恩地は日本の抽象絵画の創始者とされ、木版を主な表現手段として、数多くの本の装幀を手掛けた。自身も執筆を行い、著作『本の美術』では装本の美学について解説し、業界において貴重な資料となった。日本には古来よりパッケージを重要視する文化があり、それにより美しい優れた装幀の本が数多く生み出されてきたと秋山は語る。ホール・オブ・フェイムは日本独自の文化としてのブックデザインを見だし、その文化を社会に認識してほしいという願いが込められている。

講演の本編でも、質疑応答でも「デジタル化」が話題に多くのぼったのが印象的であった。

昨今、様々なものがデジタル化している時代において本もそれに当てはまる。電子書籍という新しい本の形が生まれた。時代の流れにおいて形が変わっていくのは自然なことである。しかし、実体のある本の存在は縮小はするものの絶滅はしない、と秋山は強く断言する。それは、データは形が無く、ちょっとした操作ミスや災害などで一瞬にして消えてしまう儂いものである一方、紙に印刷された実体のある本の存在感は強いと信じているからだ。また、ギリシャ古来から続く、歴史を紙に記録し残す、ということの重要性を忘れてはならないと秋山は考えている。紙による本の存在が危ぶまれる中、この重要なコンテンツの価値を再認識し守り発展させる為にJBDを開催している。ある意味、後ろを向いた提案型のコンペティションかもしれないと秋山は語る。一方で、今回から応募方法が作品をデータで提出する形となった。それにより応募者の負担や審査などにおける作業効率が格段と向上した。

本はいろいろな要素の関係性でできている。経済や社会が目まぐるしく変化する中で、デザイナー、イラストレーター、作家、出版社……が生き残っていく為の方法を考え続けなければならない。新しいものを上手く取り入れつつ、価値のあるものを残すための模索、提案を力の続く限りやり続けたいと秋山は誓った。(たかだみつみ・APM学芸員)